

社会保障運動の 歴史に学ぶことの大切さ

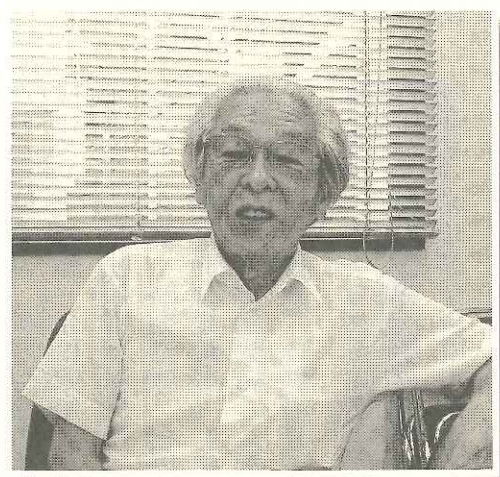
公文昭夫氏

(中央社保協50年史編集作業委員長)

聞き手

山田 稔

(中央社保協事務局長)



山田 中央社保協は二〇〇八年九月五日、結成五〇周年を迎えました。記念事業の一つとして「五〇年史」発刊を計画し、約二年間の編集・作業期間を経て、八月二十五日に「人間らしく生きるための社会保障運動―中央社保協五〇年史」を無事発刊することが出来ました。

中央社保協ではこの五〇年史発刊に先立つ二〇〇二年一月から二〇〇四年の一月にかけて隔月刊「社会保障」において「歴史探訪」という一六回にわたる連載企画がありました。中央社保協は結成されて以降様々な運動を積み重ねてきましたが、「歴史探訪」はこうした運動のまっ只中でご奮闘されてきた皆さんに、当時の苦労や思い出、エピソードなどをお聞かせいただきたいと企画されました。今回、五〇周年記念事業の一つと

して、この「歴史探訪」をまとめて一つの冊子として再録することになりました。再録にあたり、「歴史探訪」のインタビューアールとして、また「五〇年史」の編集・作業委員長としてご尽力いただいた公文さんに、中央社保協五〇年の意義といえますか歴史的役割についてお聞きしたいと思います。

公文 「五〇年史」完成めざして二年間作業をしてきましたが大変な重みのある中身に圧倒されました。「通史」を書かれた研究者や運動家とともに、四十人を超える現場の運動家のご協力をいただき「補史」を完成させることができ心から感謝しています。

五〇年の重みといえば、すでに亡くなった人が多くおられることです。初代事務局長の塩谷さん（元国分寺市革新首長）をはじめ、歴

代事務局長二十数人のほとんどが亡くなられています。また社保協結成から事務局次長として頑張つてこられた日患同盟組織部長の斉藤定信さん、いまは亡き人となりました。今回、あらためてまとめることになった「歴史探訪」に登場していただいた中でもすでに三人の方が亡くなられました。全生連の島田務さん、紙パ労連の庄司博一さん、総評・合化労連出身の立花銀三（元社保協事務局長）さんです。また「歴史探訪」を担当していた編集部の高橋健一さんも連載終了後、病のため若くして亡くなりました。

すでに亡くなられた人たちを含む中央・地方の先人達の努力と汗の結晶。それが今日の社保協運動を創造した礎石であり、これからの発展へと結びつく。ここに「歴史探訪」も含めた「五〇年史」の

もつ重たい意味があります。こうした先人たちの努力の蓄積を引き継ぎ今日の社会保障運動を支えている現役の指導者の皆さん、学者・専門家のご協力の総和が五〇年史に結実したと思っています。

「歴史探訪」の魅力

「五〇年史」を補うものとして、今回あらためて「歴史探訪」がまとめられました。この「歴史探訪」は個人対談ということもあり生き生きとして読みやすいと思います。「五〇年史」は「通史」「補史」含めて記述は論文調ですが、この「歴史探訪」は当時たたかいた真ん中にいた人たちの「生の声」がほとばしっています。まさに歴史の生きた証言です。

さらに「歴史探訪外伝」ともい

うべきトピックとして地方・地域での社保協運動の成果や前進について、平井正也さん（大阪社保協顧問）と私が対談した内容も掲載されました。さらに全労連事務局長（当時）の坂内三夫さんと全学連委員長（当時）の古賀菜穂子さんと私で行った「社保協運動の歴史と未来」と題する座談会の内容も掲載されました。若い人を代表する声が伝わってきます。

山田 八〇年代以降、改悪につぐ改悪で、その時代に育ってきた人たちがみれば社会保障運動は改悪に反対するだけで精一杯のように見えかねませんが、「五〇年史」をひもとけば、歴史の流れが理解でき、抵抗と前進、そして飛躍がありありとわかりますね。しかもアメリカの戦争協力をはじめ軍事費を増やすため社会保障費を削減

する、これを許さないたたかいの連続であったこともわかりますね。

あらたな矛盾と対立

公文 社保協結成二年後の五六年十二月に政府・厚生省から「厚生白書」が発表されましたが、それと同じ時期に「経済白書」も発表されました。「経済白書」は「もはや戦後ではない」と断言しまし

たが、同じ政府の役所同士の「厚生白書」は苦しい国民生活の実態を反映し、社会保障制度の大幅な改善、特に生活保護の充実などを訴え、政権内部の壮絶な

バトルを展開しました。これは、当時社保協や労働組合の運動の広がりや、社会保障の不備に対し、国民が強く改善を求めている世論が反映し、政府内部の矛盾を生み、拡大させたといえるでしょう。

構造的な情勢にちがいはありますが、いま似たようなことが起きています。社保協運動が地域のすみずみまで広がり、地方自治体への影響力が増す中、国民世論は大

人間らしく生きるための社会保障運動

中央社会保障推進協議会

大月書店



9条・25条の旗を守って半世紀

きくかわりつつあります。一言で言えば「潮の目が変わりつつある」ということです。たとえば小泉政権の時に「社会保障制度審議会」を廃止してしまいました。この「審議会」は戦後から、憲法二五条を基底として社会保障制度の改善、充実というスタンスで論議、勧告をしてきた大切な審議会でした。これを廃止したということは、憲法二五条を事実上、投げ捨てたことを意味しています。

福田首相は、小泉路線を微妙に修正しながら国民の怒りや批判をかわそうとしています。あらたに「社会保障国民会議」をつくり、国民の不安や要望を受け止めるかのポーズをとりながら、新自由主義・構造改革路線を貫こうというのです。これは国民との矛盾をいっそう激しくするでしょう。

山田 新自由主義に基づいた八〇年代の中曽根「臨調行革」以降、とにかく社会保障費削減だという政府・与党の考えが明確ですね。とりわけ小泉政権のとき、この新自由主義・構造改革路線による社会保障改悪が完成したかと思わせるほど社会保障制度全般に及ぶ改悪を強行してきました。ところがここに来て、「このままでは自分の命が奪われる。人としての尊厳が踏みにじられる」と広範な国民に大きな怒りが広がり始めましたね。

公文 「社会保障制度審議会」は廃止後、財界の要望にこたえて経済財政諮問会議に吸収されました。ねらいは社会保障費削減イコール大企業の負担軽減、改憲路線に基づく軍事費の確保です。そして狙いは成功したかに見えました。介

護保険法の創設、年金制度の抜本改悪、医療保険制度の大改悪、障害者自立支援法の成立や福祉の民営化路線強行、消費税増税の世論作りなどを押し進めてきました。

しかし福田政権となって、生存権裁判闘争、老人への差別医療反対の院内外での共闘の拡大などを背景に、生活保護改悪をやめさせたとか、派遣法の事実上の見直しや後期高齢者医療制度の相次ぐ「見直し」、介護報酬の改善など、改悪路線の後退や修正圧力がかつてないほど強まっています。こうして追いつめられた福田政権は、一定譲歩する姿勢を見せながら、社会保障切捨ての「構造改革路線」は変えないという、難しい綱渡り路線を歩み始めたということでしょう。

国民の怒りの質的变化

山田 去年の参議院選挙での自民党大敗は年金記録問題が直接の引き金になったと思いますが、「国民の生活を守らない、命を守らない」新自由主義・構造改革、社会保障制度改悪、社会保障費削減はもう許さないという民意がはっきり示された結果だと思っています。この悪政の転換をしない限りもう国民は許さないと思いますね。国民の怒りが今の自・公政権に向けられ、政治を変えよと彼らを包囲しているのを実感しています。

公文 そうだと思っています。「五〇年史」の記述の中で、随所に地域での社会保障運動のかつてない創意性の発揮、運動の広がりが見えています。特に、労働組合の地

域支部、非正規労働者の組織化と大衆団体との結び付き。そうした末端レベルでの地域社保協との協力共同が広がっていますね。もちろん「五〇年史」を読んでいただけるとわかるのですが、戦後一貫して多くの労働組合が朝日訴訟運動や国民医療を守る運動、介護保障運動や保育運動など頑張ってきました。

その運動がここ二〇〇〇年代にはさらに裾野を広げ、保守層までもにも影響を与える運動へと前進しています。「五〇年史」と「歴史探訪」を読まれば、戦後の日本国民と労働者、市民のたえない運動が、この国の国民の命と生活と平和を支えてきたといっても過言ではないことがよくわかります。ぜひとも地域社保協、労組組合の支部、分会などはもとより多くの方々に購入していただいて学習運

動を巻き起こしてもらいたいですね。歴史に学ぶことこそ、現実を深く知り、未来への展望を切り開く力となる。これこそ「五〇年史」発行の意義と役割だと自負しています。

